

「からだ」 なつ はづき

はつなつや肺は小さな森であり

五月来る鉛筆すべて尖らせて

夏あざみ父を許すという課題

森はふとひかがみ濡らし楸邨忌

右手から獣の匂い夏の闇

地に刺さる喪服の群れよ油照り

日傘閉じここに暮らしがあつた海

ふと触れる肘ひんやりと原爆忌

身体から風が離れて秋の蝶

夕花野ことば何処へも飛び立てず

宝石箱に小さき鏡野分来る

母の背が饒舌になり鰯雲

チンアナゴみな西を向く神無月

まどろみの隙間ふくろう息継ぎす

次々とひとりのかたち綾取りは

バイオリンソロは佳境に冬木立

日向ぼこ世界を愛せない鳩と

我儘はひとことで足る冬かもめ

沈黙の明るく置かれ晚白柚

端っこの捲れる笑顔シクラメン

雨水とは光を待っている睫毛

ミモザ揺れ結末思い出せぬ恋

クッキーの微かな湿り鳥雲に

リストカットにて朧夜のあらわれる

花疲れ鳴りっぱなしのファの鍵盤

初鯉祖母が最後に笑った日

昨日から革命中のなめくじり

薔薇百本棄てて抱かれない身体

蟻地獄母を見上げている少年

まなうらに白夜の記憶頬打たれ